

吉村 順三

(当時12歳)

イタリア空軍博物館所蔵



皇居新宮殿の基本設計や、ニューヨークのジャパンハウスなど有名建築を手がけた、日本のモダニズム建築の巨匠、吉村順三。

1908年（明治41年）9月7日、東京市本所区緑町の呉服商の家に生まれる。

1926年東京府立第三中学校（現都立両国高校）卒業後、東京美術学校（現東京藝術大学）建築科へ。在学中からレーモンド建築設計事務所で働き始める。1941年吉村設計事務所開設。1956年国際文化会館の共同設計で日本建築学会賞受賞。1962年東京藝術大学建築科教授に就任。1975年奈良国立博物館で日本藝術院賞受賞。1989年八ヶ岳高原音楽堂で毎日芸術賞受賞。1994年文化功労者。1997年4月11日逝去。



ご息女の吉村隆子氏より

父は東京本所の呉服商の家に8人兄弟の上から5番目に生まれました。

1920年1月20日、順三の父 新蔵は、当時世界中で猛威を振るっていたスペイン風邪に感染して亡くなり、それが大きなショックであったと何回も話していました。

鈴虫という季節外れで寂しげなモチーフを選んだのは、もしかしたら父親の死に関係があるのかもしれません。

関東大震災で家は全壊し、下町だったので火災が起きましたが、近くの川に逃げて、家族は全員無事だったそうです。そのため1920年にイタリアに渡ったこの絵が、現存する最も古い父の作品です。

記念帖の中に吉村順三氏の名前を発見し、調査したところ、ご息女であり音楽家をされておられる隆子氏にお会いすることができ、貴重なファミリーヒストリーを伺うことができました。20世紀最悪のパンデミックといわれたスペイン風邪の世界的

流行から、奇しくも100年後のいま、世界は新たな感染症の脅威に直面しています。過去から教訓を学び、これを乗り越えていくことを切に願うとともに、過去の歴史そのものを守り伝えていく重要性を強く感じます。